礼拝説教（2025 年４月６日）

説教者：中村信哉

心配しなくてよいのです

マタイの福音書６章 25-34 節

はじめに

今日の聖書箇所には、「心配」という言葉がたくさん出てきます。イエス様は、私たちが様々なことを「心配」してしまうことを、よくご存じなのでしょう。そこでイエス様は、「心配」というテーマで説教をなさったのです。

私たちは様々なことで心配しますが、イエス様は今日の聖書箇所で、特に三つの心配事について語っています。①食べ物や飲み物などの「いのちの心配」、②着る物などの「からだの心配」、③未来などの「明日の心配」。

1. 信仰の薄い人たち

25 節を見てみましょう。**「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配するのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか」**。イエス様は、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと、食べ物、飲み物、着る物のことで心配するのはやめなさい、いのちやからだのことで心配するのはやめなさいと言われます。

イエス様は、この「心配」についての説教を誰に語っているのでしょうか。30 節には、**「信仰の薄い人たちよ」**と出てきますから、この説教は「信仰の薄い人たち」に語っているということが分かります。また 26 節や 32 節には、**「あなたがたの天の父」**と出てきますから、神様を父としている人たち、つまり神様の子どもとされた人たちに語っていることが分かります。ですから、イエス様が心配するのはやめなさいと語っているのは、イエス様を信じて神様の子どもとされている人たちですけれど、まだ信仰が薄い人たちに語っているのです。「信仰が薄い」というのは、「信仰が小さい」、あるいは「信仰がわずか」という意味です。つまり「信仰が不足している」ということです。

イエス様によれば、「心配」と「信仰」は関係があるのです。信仰が不足しているから、心配をするのだと言われるのです。逆に言えば、信仰を持ち、信仰を厚く、大きく、増やしていけば、心配事に苦しむこともないのだと言われるのです。

イエス様は、食べ物、飲み物、着る物の心配、いのちやからだの心配をする時、どのような信仰を持つべきかを教えています。まずイエス様は、26 節で**「空の鳥を見なさい」**と言われます。空の鳥がどのように食べ物や飲み物を手に入れ、いのちを保っているのかを教えられます。鳥は、種蒔きも、刈り入れも、倉に納めることもしません。つまり鳥は、食べ物や飲み物を育てたり、保存したりしません。しかしちゃんと神様が養ってくださっているので

す。鳥にちゃんと食べ物や飲み物を与えて養ってくださる神様が、御自身の子どもである私たちに食べ物や飲み物を与えてくださらないはずはないと言われるのです。人間の父親でも、野生の鳥に餌を与えることに必死になって、自分の子どもを餓死させる父親はいないでしょう。まず自分の子どもに十分に食べ物や飲み物を与えるのが普通です。父親にとっては、野生の鳥よりも自分の我が子のほうが大切だからです。同じように神様も、野生の鳥よりも御自身の子どもである私たちのほうを大切に思い、価値ある存在と思ってくださっているのです。そうであるならば、野生の鳥に食べ物や飲み物を与えていのちを養ってくださる神様が、御自身の子どもである私たちに食べ物や飲み物を与え、いのちを養ってくださらないはずはないと言われるのです。私たちは、イエス様を信じて神様の子どもとされています。その私たちを、神様が餓死させるようなことはあり得ない。必ず食べ物や飲み物を与えて養い、いのちを支えてくださるのです。私たちは、そのことを信じなければなりません。

着る物のことはどうでしょうか。イエス様は 28 節で**「野の花がどうして育つのか、よく考えなさい」**と言われます。野の花がどのように装い、美しく咲いているのかを教えられます。野の花は、働くことも、紡ぐこともしません。つまり野の花は、自分でお洒落しているわけではないのです。しかしそれでも、栄華を極めたソロモンでさえ、野の花の美しさには勝てないと言われるのです。人間が造り出した人工的な美しさは、神様が造り出した自然の美しさには勝てないのです。神様は、野の花を美しく装う方です。そうであるならば、御自身の子どもである私たちをも美しく装ってくださらないはずはないのです。庭のガーデニングに必死になって、自分の子どもを裸のままにさせたり、ボロボロの洋服を着させたままにする父親はいないでしょう。まず自分の子どもに美しい洋服を着せるのが普通です。そうであるならば、神様が、御自身の子どもである私たちにも必ず着る物を与え、私たちのからだを美しく飾ってくださるはずなのです。私たちは、そのことを信じなければなりません。

イエス様は 32 節で、**「あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます」**と言われます。神様は、私たちには食べ物、飲み物、着る物が必要であることを知っておられるのです。ですから神様は、イエス様を信じる御自身の子どもに、それらを必ず与えてくださるのです。

イエス様は、神様が必ず私たちに必要なものを与えてくださると信じる「信仰」を求めておられるのです。しかしこれらの約束は、神様を「父」と呼ぶ、神様の子どもとされた人たちに与えられた約束です。これらは、イエス様を信じる人たちに与えられた約束なのです。ですから、食べ物や飲み物や着る物の心配、いのちやからだの心配から解放されたいと願うなら、まずイエス様を神と信じ、自分の救い主と信じなければなりません。

2. <u>神の国と神の義を求めなさい</u>

では、イエス様を信じる神様の子どもは、鳥のように種蒔きや刈り入れや倉に納めることをしなくて良いのでしょうか。野の花のように働きもせず、紡ぐこともしなくて良いのでしょうか。そうではありません。私たちも食べ物や飲み物や着る物、自分のいのちやからだの

ために働かなければなりません。神様は、私たち人間を御自身のかたちに創造され、**「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」（創世記 1:28）**と言われました。神様は私たち人間を、神様に代わって、この地上で神様が造られたすべての物を治め、管理させ、発展させる使命を与えられました。そのため労働は、人間の本来的な使命です。イエス様は、働かなくて良いと言われたのではなく、心配するのはやめなさいと言われたのです。

33 節でイエス様は、**「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」**と言われました。イエス様を信じる神様の子どもは、まず「神の国と神の義」を求めなければなりません。つまり、神様を第一に求めなければならないのです。ここでの「まず」という言葉は、「最初に」「一番大切に」という意味です。イエス様を信じる神様の子どもである私たちは、決して神様だけを求めれば良いのではありません。私たちは、しっかりと労働し、食べ物や飲み物や着る物を求めなければなりません。しかしそれらは、一番最初に求めるものではないとイエス様は言われるのです。あくまでも、一番最初に求めるものは、仕事でも、食べ物や飲み物や着る物ではなく、神様であると言われるのです。

そのことをよく表しているのが、私たちが毎週礼拝で祈る「主の祈り」です。「主の祈り」は、イエス様が弟子たちに何を祈るべきかを教えたものです。イエス様は、まず神様の「御名があがめるられるように」「御国が来るように」「御心がなるように」と祈るようにと言われました。その後に、「日用の糧が与えられるように」と祈るようにと言われたのです。つまり、まず神様のために祈り、その後に食べ物や飲み物や着る物のために祈るようにと言われたのです。

イエス様は、まず神様を求めれば、神様を第一にしていれば、必ず私たちに必要なものは与えられると言われるのです。私たちは、そのことも信じなければなりません。32 節には、**「これらのものは、異邦人が切に求めているものです」**とあります。「異邦人」とは、神様を信じない人たちです。イエス様を信じない人たち、神様を信じない人たちは、まず第一に食べ物や飲み物や着る物を求めます。決して神様を求めません。私たちに必要なすべてのものを与えてくださる神様を求めませんから、心配になるのです。心配から解放される道は、神様を求めることにあるのです。私たちに必要なものをすべて与えてくださる神様を、まず第一に求めていく時に、すべてが与えられていくのです。

3. <u>労苦はその日その日に十分にある</u>

34 節には、**「明日のことまで心配しなくてよいのです」**とあります。イエス様は、未来を心配することもやめるようにと言われます。そして、**「明日のことは明日が心配します。労苦はその日その日に十分あります」**と言われます。「心配」と訳されている言葉は、「メリムナオー」というギリシヤ語ですが、その語源は「分かれる」という意味があります。つまり一つのことに集中できずに、心が分かれてしまう状態を「心配」と呼んでいるのだと思います。

イエス様は、「労苦はその日その日に十分あります」と言われますが、その日の「労苦」

に集中できずに、明日の「労苦」のことまで考えてしまう、そうして心が「今日」と「明日」に分かれてしまう、今日の「労苦」に集中できない状態を「心配」と言うのだと思います。イエス様は、明日の「労苦」のことまで考えずに、今日の「労苦」に集中するようにと言われます。明日の「労苦」が心配で、今日をしっかり生きられなくなるようなことがあってはならないと言われるのです。一日一日の労苦としっかり向き合い、一日一日をしっかり生きていくことをイエス様は求めておられるのです。

ルカの福音書にマルタという女性が出てきますが、マルタはイエス様のもてなしのために心が落ち着かないことがありました。その時にイエス様は彼女にこう言われました。**「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです」（ルカ 10:41-42）**。イエス様は、一つのことに集中するようにと言われました。いろいろなことに思い煩うから、心を乱したり、落ち着かなくなるのです。一つのことに集中する時に、心配から解放されるのです。

明日、一週間後、一か月後、一年後のことを心配しながら、今日を生きていると、今日という日をしっかり生きることができなくなります。今日向き合うべき労苦にしっかりと取り組めません。心配だけで一日が過ぎてしまうこともあります。私たちは、明日、一週間後、一か月後、一年後のことは神様に委ねて、まず今日という日をしっかりと生きることが大切なのです。イエス様は 27 節で、**「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか」**と言われました。私たちが心配する多くのことは、心配してもどうにもならないこと、何の解決にもならないことがほとんどです。私たちは、心配事を神様に委ねて、今日の労苦にしっかりと取り組んでいくこと、神様を第一に求めていくことが大切なのです。

<u>おわりに</u>

私たちには、様々な心配事があります。老後のこと、病気のこと、経済的なこと、家族のこと、仕事のこと、人間関係のことなど様々です。心配を克服していく方法は、信仰を持つことです。何を信じていくかで、心配することも安心することもできるのです。最悪の状況になるに違いないと思い込んで信じれば、心配も増していくでしょう。しかし私たちの父となってくださった神様を信じる時、私たちの必要をすべてご存じの神様を信じる時、その神様にすべてを委ねていく時、私たちの心配は安心へと変わるでしょう。

私たちは、神様を信じて、心配事のすべてを神様に委ねていき、まず何よりも神様を第一に求めていきましょう。そうすれば、すべてが与えられ、道が開かれていくはずです。明日のこと、未来のことは、私たちには分かりません。しかし神様はすべてご存じです。私たちは、明日のこと、未来のことは神様に委ねて、今日の労苦としっかりと向き合って、集中していきましょう。一日一日をしっかりと神様の御前で生きる、それが何よりも大切なのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、日々様々なことを心配してしまう信仰の薄い者です。それでもあなたが、イエス様にあってあなたの子どもとして愛し、受け入れてくださいますことを感謝します。空の鳥を養い、野の花を装う神様を信頼して、あなたにすべてを委ねていくことができますように。そしてあなたを第一に求めて、一日一日に与えられた労苦にしっかりと向き合って、毎日を精一杯生きていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。